



岡村病院  
院内報

# 歩 (あゆみ)

第 57 号

発行 岡村病院  
編集 歩(あゆみ)  
編集委員会  
平成21年12月15日

## 岡村病院 基本理念

私たちは、患者様本位を第一に考え  
高度な専門医療技術をもって  
地域社会に貢献することを目指します。



「富士山西湖」 宮地 キミ様 撮影

### 今月のことば

## Count your blessings (頂いた恵を数えなさい)

或るお寺の掲示板に「感謝する心のない者は夏が来ると冬がよいと言い、冬が来ると夏がよいと言う」と書いてありました。

私共は現状の中で感謝すべきものよりも、不満なものの方に多く心をとられるようです。しかし気をつけて見ると、現状の中に感謝すべきものが沢山あるのに気付く筈です。

或るカトリック教会のシスターの方が「三つの感謝すべきこと」という文章を書いておられます。その方は若い時修練の為に一年間アメリカへ行かれました。言葉にも習慣にも慣れないままの共同生活でご苦労も多かったようですが、一年が終わった時、修練長が訓辞の中でCount your blessings (頂いた恵を数えなさい) と言われた言葉が深く心に

とまりました。それ以来毎日、一日が終り床に就く前に、その日の出来事の中から「三つの感謝すべきこと」をノートに書き記すようになりました。そして、「この小さな習慣は私を前よりも幸せにしてくれています。それは、今まで“当たり前”と思っていたことが“当たり前”でなくて“有り難いこと”“感謝すべきこと”と思えるようになったからです。」と書いておられます。

世の中が、どんなに便利になり、物が豊かになっても、感謝する心がなかったら、幸せになれないと思います。

今、自分の置かれている現実の中で感謝すべきものを見つけて、ありがたいと思う心、それはすぐれた生活の知恵ではないでしょうか。

## 患者さまの力と医師の限界

院長 岡村 高雄



最近よくマスコミには「神の手を持つ外科医」とか「名医」等という言葉が氾濫しております。この為には有名な先生にかかるとどんな病気でも治ってしまうと思いき、又逆に病気が治らないのは医師の腕が悪い、治療の内容が間違っている等の意見が場合によってはまかり通る時代になっています。

本当に医師の力はそれほど大きいのでしょうか？確かに私たちも数ミリの血管を拡張したり、縫い合わせたりさせて頂いております。しかし、この様な仕事は患者さまの体のごく一部を治す為に力を貸しているだけで、本質的には患者さまの治癒力、生命力のガイド役程度でしかないのです。

例えば、皮膚から出血しても圧迫をしているだけで殆どの場合には止血します。大きく皮膚を手術で切っても約1センチメートル程度の間隔で縫合しておけば皮膚は1～2週間後には完全にくっつき、入浴さえ可能な状態になります。人体の世界で医師が担っている役割は多くはないのです。人間の体は精密に作られており、極めて複雑に精巧に制御され、小宇宙と呼ばれるほどの世界を形成しております。この宇宙の中で医師がその内容を把握している分野は極めて少しの分野であり、関与可能な世界は極めて限定をされているのが現実です。逆に言えば、患者さまご自身の生命力、治癒力が病気を治す主体であると言っても過言ではありません。病気の方は個人個人が主役である事を自覚され、自信を持って病気に立

ち向かってください。同時に医療に携わる人々は医師を含めて、患者さまの伴走者、手助けをする役割を担っている脇役者である事を常に自覚すべきであります。黒子の役割を与えられている医師は、余り表面に出て、主役の如く役割を担ってはいけません。

一方では医師の限界、治療の限界がある事を多くの方に学んでほしいと思います。医学の進歩、最新治療の認識の拡大に伴い、どのような患者さまも「神の手を持つ医師」が行うと常に良い結果が得られるがごとく報道をされ、また認識も出来つつあります。しかし、我々医師が出来うる事は人間の体の中では限定的な事しかないのです。

医師として医療に携わる人々は、少しでも患者さまの力に成るべく全力を挙げていますが、常に良い結果が得られるばかりではないのです。病院に入院すれば常に入院以前より元気になり退院する。少なくとも入院前より悪くなる事はないと思っておられるご家族の方もいらっしゃると思います。どんな病気でも手術をし、薬を飲み、点滴をすれば良くなると認識されており、悪くなるのは診断の誤りと考え、医療訴訟の原因となる場合もあります。

患者さまご自身が素晴らしい力をお持ちであることをよく理解され、医師の力には限界がある事をご理解ください。そしてこのお互いの共通の認識と手を携える努力がより良い結果をもたらすと信じています。

## 過敏性腸症候群について

消化器内科 植村 信隆



ストレスの多い時代となり、不規則な生活と相まって排便の習慣がおかしくなる人が多くなっています。昔から「旅行に行くと便秘する」、「緊張するとトイレに行きたくなる」といった人はよくいましたが、普段は快便であることが多いものです。

しかし最近「下痢と便秘を繰り返す」、「仕事・学校に行くと下痢をする」などといった日常生活にも支障をきたすような便通異常の人が増えてきました。都市部では電車で通勤中おなかが痛くなってトイレに行きたくなるから、駅のトイレの場所はすべて暗記しているといった方もおられます。

おおまかには胃腸に炎症などの病気がなくて



も、3ヶ月以上、月に3日以上腹痛や腹部の不快感があり、便が出ることで症状が変化するという状態を「過敏性腸

症候群」といいます。これは便秘のタイプも下痢のタイプも、下痢便秘が交代するタイプもあり、よくなったり悪くなったりを繰り返すことが多いです。たかが便秘や下痢といっても本人はつらく、毎日おなかの調子にビクビクしながら暮らすことになります。

治療にはストレスの原因を減らすことが一番ですが、腸の動きを調節するお薬や整腸剤を飲んだり、心を穏やかにする安定剤が効く人もいます。数年前から下痢型で男性の過敏性腸症に限り効果があるお薬も出てきました。この病気についてはどのお薬が合うかは人それぞれでご本人の調子を聞きながら、薬を探していくことになります。

排便のリズムが安定しないようならば過敏性腸症かもしれません。ただし腸や肝臓膵臓の病気がないか、内視鏡などで一度検査をしておく必要があります。

### 患者さまからのお便り 口語短歌五首

元カネボウメディカルサプライ社員

薬剤師 門田俊一郎

光りを背にして

社会的地位を持たねば

ばらの咲く

野道も吾はすたすたとゆく

あるときは

光りを背にしておろおると

行方を捜す生きざまである

冬の星しかも一つがしろじろと

わが薄弱な意志にくひこむ

貧しくても

それでも確かに生きてゐる

農村も都会も冬の陽ざしに

長ながと牛ひかれるて遠い道

やがて夕陽も沈むであらう



血管診療技師とは、日本血管外科学会・日本脈管学会・日本静脈学会の3学会構成血管診療技師認定機構のもと、

2006年から試験が始まりました。血管疾患の病態全般に関する基礎知識、および血管疾患診療に関する専門知識と実技技術を有する者を、脈管疾患領域の治療にコメディカルとして関わる専門家として認められる資格です。この度、無事資格を得ることができました。試験は6月東京にておこなわれました。しかし、試験にいたるまでもなかなか大変でした。まず、受験資格を得るために色々な条件があります。上記3学会のいずれかに所属している医師のもとで3年以上の実務経験があること。また、実務にての実際の症例100人分のレポート提出。そして、講習会に参加することです。講習会は年に2回（10月と5月）行われています。10月の東京の講習会は、参加者が多く受講できず、5月の名古屋で受講しました。20年ぶりの名古屋にやや緊張。こんな事なら数年前の愛知万博に行っておくべきだったな…とか、父の叔父叔母が生前していた20年前までは結構よく行っていた名古屋に懐かしさを感じ、

この父の叔父に実によくかわいがられて好きだったので、いろんな事を思い出しながら、前日最終便で夜の名古屋に1人着いた私は哀愁に浸っていました。翌日は朝から晩まで1日講義と実技を受講しました。当然それからが大変です。なんせ6月の試験に1ヶ月と少ししかないのですから（涙）。10月に受講した人は、受験までたっぷり時間があっていいなど少し思ったものの、元来短期集中一発勝負型の私には良かったかもしれないと2冊の参考本や受講内容と日々格闘しました。

7月の合格発表から3ヶ月あまりが過ぎ、資格に恥じないようにと責務と重圧を感じています。血管検査には色々ありますが、何と言っても要はエコー検査です。血管にある病巣を見逃さない冷静な「心」、正確な「技」術、そして多くの患者様を少しでも早く検査していく「体」力。これから、日々この「心・技・体」を身につけるよう精進したいと思っています。

最後に、資格取得にあたりご尽力くださった院長先生や、検査室の皆に心から感謝いたします。



### 3足のわらじ

～結婚、妊娠、出産、そして職場復帰～

診療放射線技師 廣地 禄代

同僚2人から「看護師国家試験、受かったー」という嬉しい報告のあった昨年3月26日、我が家にも「妊娠」というビッグウェーブが押し寄せてきました。職場結婚して約5ヶ月、2足目のわらじにようやく慣れたものの“パパとママになる”自覚などまだ…なのに早速来たのはつわりの波でした。梅雨と重な

った妊娠初期は吐きどおし、頭痛に苦しみ、台所に立つ主人を横目に寝てばかり。中期以降は切迫流産、切迫早産と言われ続けて自宅安静と、皆が普通に臨月まで働いているのにすんなりいかない自分に焦り、気持ちがついていかない毎日でした。「私、来週から仕事に行く」「ダメ。じゃ働きに行く練

習のつもりで家で動いてみ？」と言われよっしゃと動けば後2日、ぐったり寝込んで吐くその繰り返しが続きました。

お腹の中でボカスカ動くくせに予定日を越えても産まれる気配無く、主人の誕生日でもある12月9日の真夜中にやっと始まった陣痛は23時間、結局帝王切開となりました。麻酔がかかっているもお腹に手が入って赤ちゃんを出される感覚やへその緒を切る感じもわかるんだなあ、なんて手術中にぼんやり思い、翌日、身体を起こす時の激痛に「オペ後ってこんなに痛かったんだ。ICUでもっと優しく背中にフィルムを敷けばよかった」とベッド上で反省しきり。出てくるまで、いや出してもらうまで「ママになった感覚」のイマイチ薄いまま、新米ママとなりました。

ぐにやぐにやで、どう触れていいかわからない3104グラム。「要明（かなめ）」という名前をつけて出生届を出し、住民票が出来るといっちょまえに“土佐のオトコ”です。数日前までお腹の中にいたのにねと彼の人生が社会的にも始まったのを感じ、こそばゆいような嬉しさが身体を包んだあの日からはや1年、「自分自身が自分の人生の要であって欲しい。陽の照る日も月の夜も、自分の道を明るく切り開いて行って欲しい」と夫婦でそんな願いをこめた名前に添うように、今ではあんよもバイバイもすっかり上手になりました。核家族化などという世

の流れに逆行する両家ジジババフル装備、そのなかを毎日保育園がわりに渡り歩き、明るく元気いっぱいにすくすく成長してくれています。

3足目のわらじを履こうと10月に職場復帰してみたらあちこちが変化していました。赤いストラップのついたPHSを提げた同僚たちを「あらカッコイイ、TVドラマみたい」なんてうっとり眺める暇もなく、復帰リハビリどころか戦線復帰で、おかげさまで以前の感覚にすぐ戻ることができました。今は共に働いている後輩に時折自分の新人時代を重ね、業務の傍ら久しく開いていなかった虎の巻を読み返す毎日です。

自ら学んだ時に得られた知識と教える時に得られる知識の違い、育てているつもりが育てられている、そんな幸せな営みを公私で感じながら、時を経ることの面白さを実感しています。

独身時代から一変、結婚し、子供を持ち、と変化し続ける毎日ですが、バタついた焦りや漠然とした不安は要明と共にじわりと身体の外に抜け、流れに身を任せる大事さがちょっぴり見えてきました。まだまだ3足を上手に履きこなせていませんが、次に見えるステージはどんな場所か、何が来ても慌てずに、でも波が来たら上手に乗れるよう、夫婦で親子で支えあいながら、穏やかに毎日を過ごしていきたいと思っています。



## 「初心を忘れない」

3F看護師 岡村 加代

岡村病院に入職して3週間が過ぎました。私は、ここ半年あまり看護職から離れていた為、この度、就職するに当たっては「注射や採血は以前のようにできるのだろうか」等、初歩的な技術も含め不安でいっぱいでした。

外科・内科病棟に配属されたのですが、最初の印象は、“なんて忙しい病棟”でした。さながら、8年前に勤務していた救急病院に戻ったような気分でした。身体はいろいろな面で年齢を重ねています。「本当にここでやっていけるのだろうか？」と

自問自答を繰り返す毎日でした。

しかし、忙しい業務の中指導して下さるスタッフは優しく、又、丁寧に指導して下さいだったので、「ここで頑張ってやっていこう」と決心をすることができました。今では日々新しい知識・技術を吸収できることの喜びを実感しています。

これからも、この喜びを（初心を）忘れず、患者様に満足して頂ける看護が提供できる様に努力していきたいと思います。



## 母

3F看護師 上村 美緒

母はリウマチで私が中学三年生の時から病気と闘っています。母の病気は私が看護師を目指したきっかけでもありました。

私は中学校を卒業すると高校の看護学科に入学しました。そして看護師になる為日々勉強に励みました。私が高校三年生になったある日、突然母が口を利いてくれなくなりました。食事も自分の分だけ作り、洗濯も自分の分だけするようになりました。しばらく私は食事や洗濯を自分でせざるをえなくなり、それは慣れない私にとってはとても大変でした。私はその時、なぜ母がこの様な行動をとったのか分かりました。リウマチで手首が腫れ、熱を持ち指も徐々に変形してきていたのです。母はそれでも仕事をやめず家事も一人で全部してくれていたのです。私は母から「痛い」という言葉をあまり聞いたことがありません。学校で

リウマチの事は勉強していましたが、勉強していなかったとしても母の手をみればその痛みに気付かなければならなかったのです。その時私はリウマチの事、そして母の事を理解していなかった事に気付きました。分かっている“つもり”だったのです。

三週間ほどでいつもの母に戻ったのですがその日から私は家事を手伝うようになりました。

五年後、高校の看護専攻科を卒業し、看護師になったその年に母は退職しました。私が社会人になって安心したのもあったと思います。私の為に病気と闘いながら働き、受験のときも支えてくれたことを思うと涙が出ました。今度は私が母を支える番です。母への感謝の気持ちはこれからもずっと消えることはありません。





特別寄稿 藤川先生の短編小説

2009年9月高新文芸に掲載されました

## 「ポチ」

藤川クリニック 院長 藤川 義久



ポチと出会ったのは今年の八月初めだった。アパートから歩いて五分くらいの所にある空き地で草を噛んでいるのを散歩の途中で見かけたのが最初だった。干からびた地面の上で土ぼこりにまみれてみすぼらしい姿だったが、おそらく生まれて三ヶ月くらいとしか思えず、邪気の無い黒い瞳が真っ直ぐに僕を見つめてなぜか気を惹かれた。野良犬だから血統などとは縁が無いだろうが見た目には茶色の柴犬だった。普通なら母親から離れられない頃で、そのことが両親を亡くしてからずっと一人暮らしだった僕を惹きつけたのかも知れない。それからというもの毎日のように朝晩に空き地に立ち寄り、子犬に食事を与えてから一緒に物部川の河川敷まで散歩するのが日課になった。名前はポチと名付けた。

不思議にもポチは初めての出会いから僕に対して人見知りすることがなかった。そして散歩のあと空き地に戻ると板切れやトタンで作ってやった簡略な小屋に座り僕がアパートに向かうのをじっと見ているだけで決してあとを追いかけて来ようとはしなかった。アパートでは犬を飼う事が禁止だったしおまけに僕はその頃昨年の不況のあおりを食らって失業中だったからそのことで僕の気持ちは楽になった。不安定な身分では何時ポチを手放さなければならない時が来るかもしれないしそもそも犬の餌代どころか自分が食っていくのも精一杯だった。「ポチ、またあした来るからな」そう言う僕に座ったまま尻尾を大きく振りながら、「クン」

と答えるのだった。

八月も中旬となり世間はお盆の帰省や旅行やらで騒がしくなったが僕の場合、別にポチがいたからでもないが職安に出かけるほかはぼんやりと過ごした。ただ一日だけ両親と御先祖様の墓参りに田舎に帰ったが親戚や友達に会っても肩身の狭い思いをするばかりと逃げるようにアパートに舞い戻ってしまった。職が無いことはこんなにも惨めなものだろうか。家財を処分して空洞のようになり、電気代の節約で明かりを消した薄暗い部屋でわずかに残った本を手にとるがそれにも集中できずすぐに放り出してしまう。溜息をつく力も失せてしまったような気分だった。

お盆明けの次の週に職安から採用の面接があるという連絡があり、当の会社に出かけた。以前勤めていた会社よりは随分小さな会社だったが同じ電気器具の組み立てを扱う会社だったので僕は少し安心感を持って出かけた。五十過ぎで頭のはげた背の低い男が面接の相手だったが暑い最中の昼下がりのせいか汗まみれのワイシャツの前をはだけただらしない格好をしていた。壁に取り付けられたクーラーは動いておらず窓が開け放たれていた。

「前の会社では？えーと」眼鏡を額に上げて書類を見ながら言った。「電気部品の組み立てラインにいたんだね」あまり興味の乗らない話し方だった。

「はい、高校を出てから三年の間ずっと同じ仕事に就いていました」気に入ってもらお

うと僕は出来るだけ明るく大きな声で答えたが面接係りはこちらの顔をまともに見ようとしめない。そしてつぶやくように言った。「資格は特に無しか……きょうびこの不景気だからねえ。今度の採用は一人だけだから何か持ってるものが無いと厳しいねえ」

「資格は無くても長い間やっていたから技術には自信があります」さっきまで見込みがあると思っていたことが思いがけなく一気に覆されそうに感じて必死になって返したが、「応募してきているのは君だけじゃないんだよ。かえって選ぶ我々のほうが苦労しているくらいでねえ。大体長い間勤めてたんだったら資格の一つくらい取っておくべきだったんじゃないかな」嫌味とともに遮断機が降りたかのような沈黙が二人の間に重く押し掛かった。

「分かりました。もし採用して頂けるなら一生懸命やりますのでよろしくお願ひいたします」見込みはないと思ったが頭を深く下げて僕は立ち上がった。ドアを閉める時にもう一度面接係りを見たが机に目を落として書類に何かを書き込んでいるだけだった。職安からの依頼でお義理に会ったとしか思えないような対応だったがさっき出入口ですれ違った応募者の顔がやけに明るかった。もしかしたら一歩遅れたのかもしれない、とその時初めて気が付いた。

鬱々としてそのままアパートに帰る気がしないので空き地に寄ってみた。ポチは小屋の前にきちんと座っていつものように勢い良く尻尾を振って出迎えてくれた。「今日も駄目だったよ。お前はいつも元気がいいな」

差し出す手をペロペロと何度も舐めては僕の顔を覗き込む。その信頼しきった顔がまぶしくて、恥ずかしくて堪らない。朝から一度も手を洗ってなかったことに気が付いて、

「おいおい、手が汚れてるんだ。洗ってくるから少し待てよお」照れ隠しのように言う。今度は膝に前足を置いて僕の口を舐めにかかった。

「こらこら、汚れた手のあとで。勘弁してくれよ」顔中がポチの唾でひんやりするのを感じながら僕はそのままじっと動けなかった。いつの間にか頬に付いたかもしれないしょっぱい物が気に入ったのかあるいは僕の心の中まで癒してくれようとしているのか……僕はしゃがんだままポチの首を掻きながらなされるままになっていた。

翌日からポチとのいつもの生活が始まった。子犬が成長するのは実に早い。会ってからまだ三週間しか経たないのに大きさは1.5倍くらいになったし走っても追いつくどころではなくなった。物部川では木切れを投げ取ってくる遊びを喜んでするようになり泳ぎも随分うまくなった。帰りには時々シャンプーをしてやったのもう野良犬とはとても思えないようなきれいな毛並になったが水切りのブルブルを決まって僕のそばでやるので体を洗ったあと僕は逃げ回るのが大変だった。

八月も終わりになる頃やっと就職先が見付かった。市内にある介護施設のグループホームで募集があり、幸い話がまとまった。新聞で読んでいた通り介護職の給料は高くなかったが貯金も底を突きかかり何とかしないといけないと考えていた矢先のことだったしヘルパーの資格は働きながら取ればよいということなので渡りに船とばかりに飛びつくように決めた。

「おい、ポチ、とうとう職が決まったよ」途中のスーパーで奮発したドッグフードを目の前で開けるとポチは生まれて初めての食い物に少しきょとんとしていたがすぐにうまそうに食べ始めた。

「あさってからは決まった時間に来れないか



もしれないが我慢して待っているんだぞ」ポチは分かったよ、とでも言いたげに何度も僕の顔を見直しながらドッグフードを食べて最後にべろりと舌なめずりをした。

アパートに戻り夕食を食べている時、ふと考えが浮かんだ。部屋の入り口の近くに小さな場所があって前にそこはごみ置き場だったが今では別の共同のごみ置き場が出来たので使われなくなっていた。ポチの小屋をそこに置かせてもらえるよう明日大家さんに相談してみよう。小屋を作る材木などももらえる心当たりもあるじゃないか。

翌日八時に空き地に行くとポチの姿がなかった。どこかに散歩にでも行ったのかと思いつつも何時もと違うことに胸に影が差した。

「ポチー、ポチー」何度も呼んだがどこにも見当たらない。空き地を一回りしてもう一度小屋に戻った時のことだった。草の上にぽつんと小さな血のような物が付いていた。顔を近づけるとやはり血に間違いはない。しかもすでに黒くなりかけた血はそのほかの草の葉にもこびり付いていて、草の間の地面にはドッグフードの残りがくずになって散らばっている。どうしたのだろう、ポチに何かあったのか。胸の鼓動がにわかに早くなり、こめかみはずきずきと脈打った。空き地はひとわたり確かめたからどこかほかにいるのかも知れない。僕は矢も盾もた

まらずに駆け出した。どこにいるんだ、ポチ。心の中で叫びながら空き地とその周りの道路を探し回った。あの血の印象ではかなりの怪我に違いない。しかし、どうしてそんなことがポチの身に起きたのか。止め処もない考えが頭を駆け巡り半ば狂ったように僕は走った。そして空き地脇の道路に出た時だった。アスファルトに箒で掃いたような血のあとがあり道の縁に向かっていた。道から1mくらい下がった溝の底にポチが横たわっていた。もしかして生きているのではないかという一縷の望みも転がり落ちるように飛び降りてポチの体に触った瞬間に絶たれた。恐らく凶暴な野犬にやられたのだろう。首にざっくりと噛み痕があり、即死だったと思えたことがせめてものなぐさめだった。

何時もよく遊んだ物部川がよく見える小高い丘の上に穴を掘ってポチを埋め、その上に何本も葶を植えてあげた。思えば短い付き合いだったが失業の苦しい時から職が見付かるまで気持を慰めてくれ、まるでそのために僕の前に現れたような気がした。「ポチ、気が付くのが遅くてごめんな」昨日までの日々と今日の間の亀裂の大きさに圧倒され、言い知れない虚脱に襲われながら僕は立ち尽くした。

完

(高新文芸二〇〇九年九月)



## 健康講座のご案内



健康講座は「足の痛みは万病のもと その4 ～インターベンションってなあに～」と題し、下記日程で開催を致します。

“足の痛みは万病のもと”シリーズの勉強会も、これで最後となります。次回は当院で頻繁に行っている足のインターベンション治療について勉強していきましょう。

インターベンションとは、足の血管が詰まってしまったところを風船やステントと呼ばれる器具を使い治す治療方法です。血管が詰まってしまって足がとても痛い、でも出来ることなら足を切り落とさず負担の少ない方法で治したい。それは患者さんにとって一番の願いでもあり、同時に私たち医療スタッフの一番の目標でもあります。

「さっきまで足が冷とうて痛かったのに、足がすっと温うなって治った」と、手術台に乗ったまま漏らされるそんな患者さんのひとことは決して大袈裟ではないのです。

今回は、そんな当院で行っている最新治療法、血管治療に使われる装置や画像など院長自らがたっぷりお話しします。

ご多忙とは存じますが、皆様お誘い合わせのうえご来場下さい。

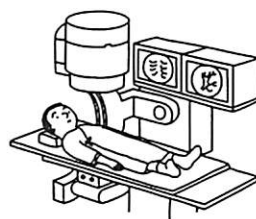
日 時：平成22年3月13日（土）午後2時より

場 所：高知城ホール 4階多目的ホール

演 題：「足の痛みは万病のもと その4  
～インターベンションって、なあに～」

講 師：岡村病院 院長 岡村 高雄（心臓血管外科医）

会 費：無 料



## ● ニューフェイス ●



渡 邊 和 子 さん

外来看護師

趣味：パズル・ピース



岡 村 加 代 さん

3F病棟看護師

趣味：スポーツ観賞



よろしくお祈いします。

■ URL : <http://www.okamura-hp.or.jp> ■ E-mail : [info@okamura-hp.or.jp](mailto:info@okamura-hp.or.jp)